

身延山墓碑史考

—江戸期諸大名関係を中心として—

町田是正

まえがき

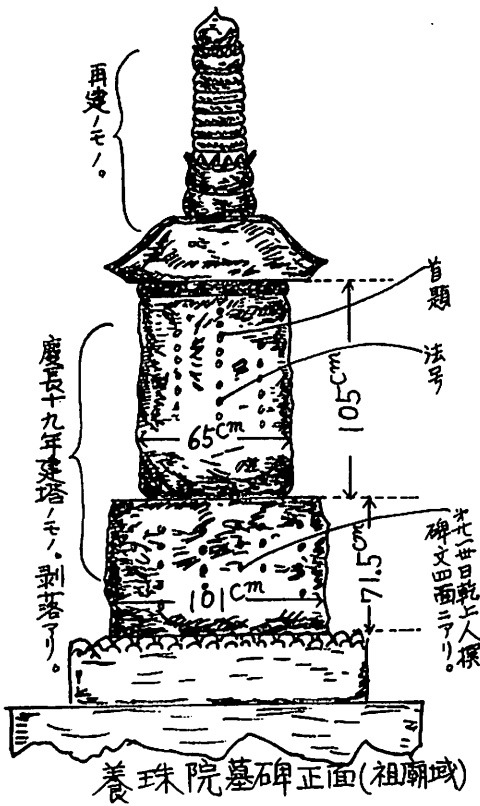
身延山は宗祖大聖人棲神の靈山・七百年の永い伝統（伝灯）を有する靈場である。この靈域には宗祖の御門弟・縁由の檀越・外護篤信者等の廟墓が少なくない。とくに祖廟域と上之山地域とに集中的に現存している。既に五百年・参百年の風雪を経、或るものは風蝕剝落が甚だしく碑銘の判読不可能なもの、または幾度かの災害のため形状さえとどめぬものがある。しかも墓碑が現存する場所は、大樹蔭蒼として雪が涓滴し、冬は酷寒下で墓石に亀裂を生じ剝落の因となり、夏は高温多湿で風蝕を容易にしている。

こうした現状をみるにつけ、墓碑建塔の由来を尋ね、現状を記録にとどめ置くことは無駄ではないと思う。本小論では江戸時代の諸大名関係者の一部の紹介を試みた。あえて門外漢をかえりみず筆を執った次第である。

◇徳川家養珠夫人墓碑◇

養珠夫人とは、徳川家康の側室で通称お万の方の名で知られている。紀州徳川頼宣、水戸徳川頼房の生母である。

夫人の墓碑は、宗祖宝塔に向って左側、草庵旧跡上壇の右隅にある大石塔である。この墓碑は夫人の生前三十九才・慶長十九年に建塔されたもの。身延山第二十一世寂照院日乾上人撰の碑文が、宝塔台座の側背に彫刻されている。しかし、風蝕剝落が甚だしく、特に第四面の碑文は判読が困難である。しかし日乾上人碑文が、夫人の生前中に撰文されたことに史料の価値を認めたい。



(養珠院墓碑正面碑銘)

南無多宝如来

南無妙法蓮華經蓮華院妙紹日心

南無釈迦牟尼仏

※養珠院は当初蓮華院と号した。この三字剝落す。

養珠夫人に関する伝承は多く残されている。その伝記の基本は「本化別頭仏祖統紀」にある。夫人は祖山の丹精に大功があり、棲神閣庭前の大洪鐘(※3)、上之山釈迦堂竝に丈六釈迦立像(※4)、宝蔵(※5)(御真骨堂)、本願会合所などを寄進建立

されてゐる。^(※6)また当山二十二世心性院日遠上人に篤く婦依せられ、慶長十三年の慶長法難に當つては、遠師が為に殉じようとした。信仰夫人の危鑑である。

^(六五三年)承応二年八月二十一日永眠された。世寿七十七才。遺骨は大野山本遠寺裏の高台に、紀州頼宣・水戸頼房の公達によつて建塔埋骨された。本遠寺の墓所は玉垣がしつらえられ、破損もなく墓碑銘も明瞭である。生前中には祖山を護り、薨じて身延の地に骨を埋められた。徳川家一門の本宗並に身延山に対する信仰は、およそ養珠院妙紹日心大師ごととお万の方を祖としてゐると云えよう。

※1 寂照院日乾上人撰碑文

「征夷大將軍前左大臣從一位源朝臣家康公御息宰相權中將頼宣權小將頼房之母公源持氏六代裔蔭山長州利広息女蓮華院日心寄財於諸僧令軫絳王都一万部功就願成更起立石廟於祖跡延山命老衲日乾銘志趣手其傍云妙典盛徳仏雖說窮□□一字其徳猶隆四生六道但証空中、慶長十九甲寅二(三?)月日誌之」。

※2 養珠院小伝(本化別頭仏祖統記卷第二十五)

○養珠院妙紹日心大夫人者初号蓮華院俗字万子鎌倉持氏之孫大元帥尊氏十四代之裔以蔭山呼家為三浦氏養子事 神祖生二男兒一者紀陽侯重相頼宣卿二者常陽侯貴門頼房卿也慶長三年戊戌夫人二十二歳喪考妣 父蔭山長門守利広法号誠証院連経 於是供仏課僧追孝維務躬自緇帑素說訓誨日而不怠篤婦依身延遠公也十三年戊申常樂日経与浄土宗有事遠公請宗論因政無監議當死刑夫人聞而謂身軽法重仏祖遺訓忠也孝也但在于此遠公者吾本師本師就刑吾亦致死自著葬服而待是時勇氣可謂大丈夫也 神祖見其直而大感止之 是時葬藏中存見 凛烈堅信過人而寒終遠天聽後陽成帝親染辰翰書南無妙法蓮華経七大字賜之 是七大字 身延藏存 元和二年丙辰夫人年四十遭於 神祖喪人湿袖 凛烈堅信過人而寒終遠天聽後陽成帝親染辰翰書南無妙法蓮華経七大字賜之 是七大字 身延藏存 元和二年丙辰夫人年四十遭於 神祖喪私設法会于身延山奘寂殿重也 是時牌位後造社 寛永十九年壬午遠上池上而化夫人築精舍於大野扁呼本遠寺猷廟聞之寄封戸奘正保元年甲申夫人詣身延拜祖塔欲上七面山神忌女人嫌則見恠夫人潔齋七日步踏巖巖是日快晴山殊静是時夫人年六十八如今天下女人恣入神境成夫人賜也慶安元年戊子 神君三十三回講聚小石子欲書題目盈妙経六十六部字數既而跋之貴介公子大夫諸士聞而助之終成二十一万

部字数孝子頼宣卿納是於和歌浦海上幻出一島 上皇後水尾帝聞書題号皇后東福門院亦爾頼宣卿別造石爾崇之築一基塔今之紀州養珠大塔是也
承応二年癸巳八月二十一日感疾而逝壽七十七遠遺語藏於甲州巨摩郡大野山本遠寺常陽侯亦造蓮華寺以備冥福云

※3 洪鐘銘「寛永元年龍集甲子八月如意球日、前任寂照院日乾謹誌」。

洪鐘寄進について「遂に同年八月前住乾上に鐘銘を請ふて大鐘竣せり。時の奉行南延房日遼・治工棟梁は駿州江尻の住藤原山田若狭守種香なり。」(身延山史 久遠寺綱・昭和四十八年刊)

※4 「丈六釈迦堂棟札「千仏造立大施主養珠院妙紹日心比丘尼第二十六世日通」同棟札「当堂願主日心併遠藤庄兵衛等奉加有之日通」。

丈六堂古記「山主日通丈六堂建立を企つ奉安仏は京都禁中三位様と村雲様と又は養珠院なりと彫刻師は京都三寶寺中正院日護上人」。

※5 宝蔵寄進について、「養珠夫人の外護によって宗祖真骨の宝蔵(三間半四方)を建立せり。是れ御真骨堂建立の嚆矢なり」(身延山史・一一三頁)とある。古記にも「宝蔵(真骨奉安所)第廿二世日遠代慶長年中紀伊大納言頼宣卿の母堂養珠院妙紹日心大姉立之」。

※6 身延山略譜「宗祖真骨ノ宝蔵三間半四方建立慶長年中養珠院殿寄附。…大野本遠寺開祖紀州養珠院初ハ蓮華院ト云徳川家康ノ愛妾ニシテ於瀟ノ方様ト云フ廟所埋葬地也。養珠院殿妙紹日心大姉承応二癸巳年八月二十一日他界紀州頼宣水戸頼房ノ母堂身延乾遠通ノ三代大薫功有之。」(第廿二世心性院日遠上人条)

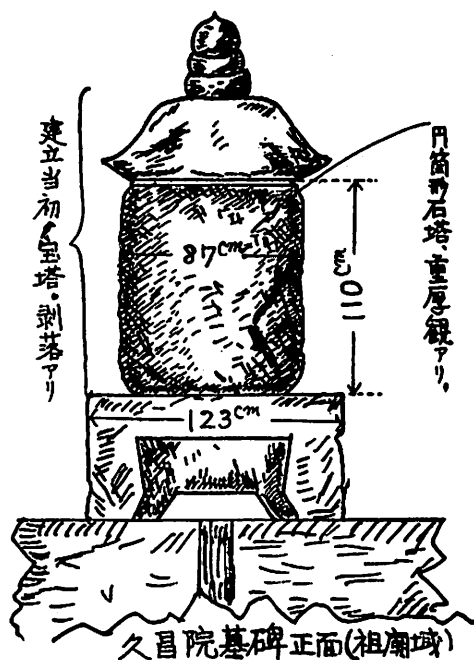
◇徳川家久昌院夫人墓碑◇

久昌院は水戸家祖・徳川頼房公の室で、黄門徳川光圀竝に讃岐松平頼重の生母である。(※7)

久昌院墓碑は宗祖廟域、養珠院宝塔と隣接している。杉木立の蔭に在り風蝕剥落がはげしく、碑銘は判読し難い。

墓碑は讃州松平頼重によって建塔された。久昌院は寛文元年(一六六一)十一月十四日に薨じた。その十三回忌菩提のため、徳川光圀は常陸(常陸太田市)に久昌寺を建立したが、此寺は久昌院の私諡(一六八二)の靖定に因んで、靖定山禪那寺とも云う。(※8)

久昌院は生前中、身延山と直接の交渉はなかった。しかし長子黄門光圀が身延山へ参詣しており、法主一円院日脱



(久昌院墓碑正面碑銘)

寛文元辛
丑年

南無……經久昌院心周日句大姉

十一月十四日

(墓碑裏面銘)

從四位上左近衛少將兼

讃岐守源朝臣頼重奉立

上人と面談されている。そのおり「光圀建議案十五條」^(※9)の祖山に対する改革の提議がされている。光圀は周知のように黄門(副將軍)として幕政の補佐、有職故実にも精通していたが、右の建議案中には識見豊かな改革案が示されている。

また、身延文庫に秘藏される心越禪師筆光圀賛「^(※10) 積尊涅槃図」の大掛幅は、光圀が母堂追善のため久昌寺へ献納されたものである。それを明治十一年日鑑上人の代に身延山へ寄進されたものである。^(※11)

※7 久昌院夫人小伝（本化別頭仏統紀第二十五卷）

○久昌院心周日勾大夫人者藤原姓谷氏女常陽侯光國贈陽侯賴重兩御母也荷擔宗門其功如許寛文元年辛丑十一月十四日感疾泊然而逝
光國卿稱置邑造靖定山久昌寺祭之又洛本園寺宮法華懺法会築墳於身延山竭之孝志賴重卿又啓般若台広照寺修之追孝夫人遺烈万世婦
女護法神者也

※8 身延山久遠寺藏「廟墓調査録」の水戸久昌院殿の墓の頁に「因ニ記ス義公光圀卿ハ寛文元年七月父考頼房乃チ威公ヲ喪ヒ同年十一月十四日妣（母ノ久昌夫人）ヲ喪ヒ、而テ十三年ノ延宝元年ニ兩親御菩提為メ久昌寺ヲ創設」と添え書がある。久昌寺建立の経緯については、水戸貴門光圀卿・山の御寺久昌寺編・昭和四十一年刊）所中の「山吹日記」を参照されたい。

※9 光圀建議案十五条のうち、抜萃六条を「身延山史」（久遠寺編・一六一頁・昭和四十八年刊）にみる事ができる。

※10 「釈尊涅槃図」光圀贊「釈尊仮現涅槃為衆生生死易歸朝露可惜分答拜此像渴仰心生預茲念無常念起制新様者誰常山会韻氏為画
図者誰大明僧心越子莊嚴演寅為先妣每歳二月望供養巨奉祀、參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀拜贊並書」

※11 「釈尊涅槃図」掛幅の口書に「光圀公贊心越師画涅槃像前伝灯日薩師周庵水戸久昌寺納之七十四嗣法日鑑代袿裝修理明治十一年三月十八日」とある。

◇松平家浄光院夫人の墓碑◇

浄光院は徳川二代將軍・秀忠の側室、神尾氏の出でお静の方と呼ばれ、会津松平中將保科正之公の生母である。その小伝は別頭統紀にみえ、^{（※12）}法号を浄光院法紹日恵大姉と云う。

墓碑は保科正之公の建立になり、^{（※13）}祖廟域草庵旧跡の上方左側にあり、台座からの高さは五メートル余の五輪大石塔である。

会津若松市浄光寺・山形市浄光寺は共に浄光院を開基としてゐる。因に保科正之は寛永八年信州高遠三万石の藩主となり、寛永十三年会津二十三万石の大守となる。將軍家光の死後、遺言によって幼少の家綱の補佐役をつとめ幕政の重鎮となる。幕藩体制成立期の名君とされ、家臣団の組織、新田開発、土地租税の整備、領民の支配、備荒貯蓄制

社倉義倉の設置など、その業績として評価されている。

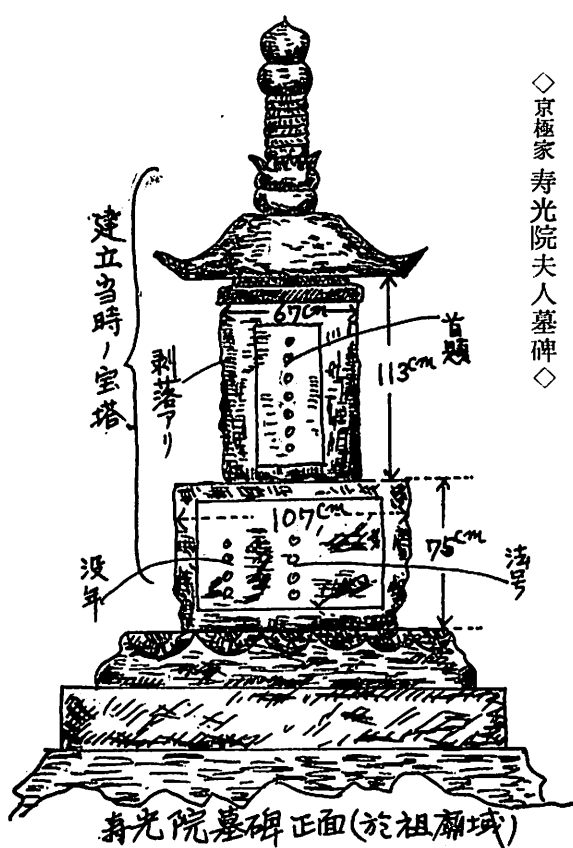
※12 浄光院小伝（本化別頭仏祖統紀卷二十五）

○浄光院法紹日慧大夫人者少事猷廟生会津中将正之卿婦依身延乾上大振護法力寛永十二年乙亥九月十七日感疾而逝孝子正之卿築香花地今之会津浄光寺是也生前誦唱題其数居多清繁堅信精進勇猛可謂婦女大丈夫志者也塔身延山

※13 墓碑左側銘「会津孝子從四位上左近衛權少將源朝臣正之奉記」。

墓碑裏面銘「顯妣神尾氏以天正^甲生相州小田原城下卒信州高遠寿五十有二歳」（「廟墓調査録」（久遠寺蔵））。

◇京極家 寿光院夫人墓碑◇



（寿光院正面碑銘）

南無妙法蓮華經、

寿光院殿昌栄日慈大姉

万治二年^巳 亥六月上旬四日卒

（墓碑右側碑銘）

丹後国正四位侍從

京極氏高□□□□□

寿光院は丹後宮津城十二万京極高広公の室で、法号を寿光院殿昌栄日慈大姉と云う。万治四年六月逝去さる。墓碑は祖廟城草庵旧跡上段・久昌院墓碑の左隣りの大石塔である。夫人は備前池田輝政公の女で、二代將軍秀忠の養女となり、京極高広の許へ嫁した。現在、宮津市金屋谷の高津本妙寺は、養父秀忠菩提のため、寿光院が創建したものである。京極高広は高知の次子・高知は近江蒲生郡より出でて信州伊那十万石を領し、関ヶ原役後に宮津城に封ぜられ十二万七千石を得た。

京極高広に一子あり。高国と云う。この高国は母の寿光院・了知院兩靈永代追善供養料として金四十兩を身延山へ志納、惣風呂を建立寄進す。^(※14)この施主高国公の丹精に対して、身延山に於ては兩靈の命日に当る一月十九日、六月四日には全山あげて祖師堂に会して追善読誦会を修した。^(※15)

※14 惣風呂(浴室)の建立寄進について、「身延山略譜」(一ノ頼妙了寺蔵)の第二十六世智見院日通上人条に「浴室七間八間新築造正保三丙戌十月廿七日施主京極丹後守高国・日通判形」とみえる。浴室の場所は「身延山図経」(貞享元年九月版・久遠寺蔵)によれば菩提梯登口左手に書きこまれている。浴室は文政十二年九月六日焼失す。

※15 古文書「惣風呂焼料制法」(寛文元年辛丑五月)
「焼於風呂令休息衆徒勞患給寔是英大之御利益広大之御扶助也。…正月十九日六月四日之御命日満山之衆徒集祖師堂奉誦妙経全部可供兩尊靈御追善者也」。

◇前田家寿福院の墓碑◇

寿福院華岳日栄夫人の墓碑は、祖廟城旧草庵跡の左側上段、小型五輪塔三基中の一つで、台座も無く地上一米四十厘程の石塔である。他の一基は寿福院の母堂のもの。池の一基は不明。

夫人の小伝は仏祖統紀^(※16)にみられるが、加賀・能登・越前三国の大守・前田利家の側室である。越前浅倉^{いさくら}家臣の女で

前田家二代利長及び大聖寺城主利常の生母である。いま「身延山史」に依れば次のようである。(※17)

「元和四年には加・越・能三州の太守菅原朝臣重相前田利家卿側室、高岡重相利長・小松黄門利常兩卿の母堂たる寿福院日榮夫人（寛永八年三月六日六十二歳逝去）の外護に依って五重塔（三間四方高廿間半）の斧初めを同年五月三日になし、同五年十月竣成、十一月十三・四・五の三日間立塔供養を修し、(※18)又同年奥の院祖師堂（六間四方外椽付）同拜殿（七間半四間）等も又同夫人の外護寄進の力に依って建立せられたり。(※20)五重塔建築の大工棟梁は遠州の住人鈴木近江守・藏原長次等にして、奉行には法雲坊日詮・東之坊日贊・惣執行として山本坊日彦等之を監督せり。この夫人の功を没せざる為め爾來毎月六日の正当には宝藏に於て自我偈を誦誦して回向せり。」と。

夫人は五重塔建立寄進を身延山だけにとどまらず、池上本門寺・滝谷妙成寺にも建立した。現に本門寺と妙成寺のものは文化財の指定保護をうけている。身延山の建塔は元和四年第二十四世日要上人代、のち寛文二年前田家五世綱紀の丹精をもって上之山へ移転した。文政十二年焼失、再建、しかし明治八年焼失し以後再建なし。

宗門史上稀有の事件とも云える「寛永身池対論」に際し、京都妙覚寺の日奥上人の不受強硬論・身延無間墮地獄の高唱に対して、また池上十六世日樹上人不受不施唱導に対して、寿福院は身延と池上の対立緩和につとめた。(※21)その仲介の労は成らなかつたが、その功は多としなければならぬ。

※16 寿福院小伝（仏祖統紀卷二十五）

○寿福院華嶽日榮夫人者加能越三州太守菅原朝臣重相利家卿側室高岡重相利長小松黄門利常兩卿母也父者上木氏越前浅倉家臣法号凶乘院護岳永鎮云 母者山崎氏女 法号寿命院久延日長 夫人性篤三宝荷擔宗門身延芬陀利峯伽藍五重大塔洛龍華大殿鼎葦一新其天正十五年丁亥四月卒 云寛永十一年甲戌卒 功如許又任園有滝谷妙成寺者像薩睡之旧趾夫人振力仏殿僧坊鐘樓門廡伽藍所有輪奐備矣孝子利長卿為領封戸又昔在越前香花地呼経王寺今曳加之金沢兄有日淳上人姪有日条上人僧主妙成経王兩寺是時加州仏法繁盛乎哉寛永八年辛未三月六日東都感疾而逝寿六十

二池上火矣滝谷墳矣

※17 身延山史（久遠寺編・昭和四十八年刊）百十八頁。

※18 身延山第二十四世蹟是院日要上人棟札

「大日本甲斐國巨摩郡波木井郷身延山久遠寺五重塔棟札謹染之：信心願主加能越大守諫議大夫朝臣母公寿福院日榮抽於淨心建於靈廟……」。

※19 古記録「廿四代日要代元和四戌午五月三日新初七月七日繩張同五年己未十月成就十一月十三四五塔供養有之高式十一間。寛文三癸卯年松平加賀守綱利金子六百五十兩為施主今所移之」。

※20 「身延山歴代略譜」（妙了寺藏版）廿四世日要上条参照。

※21 寿福院の身池和解への幹旋「旧冬二十六日從賀州御袋様同二十九日迄毎日兩度づつ使札被下候て御扱被成候。先一味和談し御袋様において盆取替計りも仕候へと被仰候て何共迷惑に存入候き。当正月八日御城へ直仕候次てに参候て御札申上候へば、座着より和陸候へと御扱被御出其終日同言にて被仰候」（日樹消息・「与岡山蓮昌寺」寛永六年三月）

◇三浦家寿応院の墓碑◇

寿応院殿妙相日覚大姉は、三河刈谷城主・三浦志摩守明敬の母堂で、その墓碑は祖廟城草庵旧跡左側にある。二丈余の大石塔で碑銘によれば三浦共次の造立になる。^(※22)夫人は寛文二年壬寅八月四日に逝去された。

三浦家は武蔵七党の旗頭として相模国三浦郷に住し二万石を領した。^(一八〇年)治承八年の源頼朝挙兵に當って戦功ありしがのち執権北条時頼の策謀がために同族郎党彈圧をうく。一族は日向延岡に余命をつなぎ、徳川時代に刈谷城へと転封された。

寿応院は祖山第一の関門・総門（開会関）の寄進者だとされている。^(※23)久遠寺蔵「廟墓調査録」には、「身延山総門建立ノ施主ナリ」と見える。総門は風雪三百年を経ている。礎石の上に櫓の大柱を建て精巧な組物で重量の瓦屋根を

支えた高麗造りの名門である。大柱には三浦家の定紋「丸に三」が彫られている。建立以来、寛保元年と安政七年の二回に修理が行われている。現に総門楼閣は身延町文化財指定の遺構である。

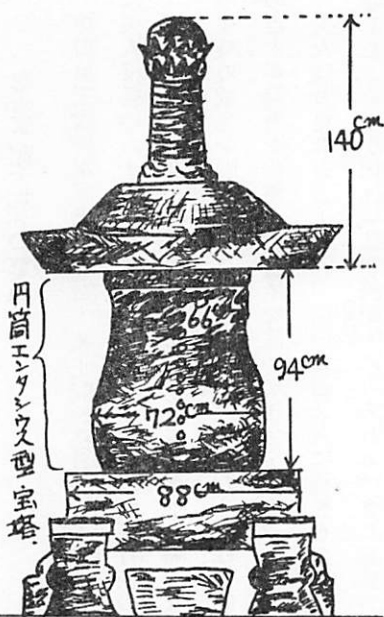
※22 寿応院墓碑正面碑銘「寿応院殿妙相日覚大姉・寛文二壬寅八月四日」とある。墓碑背面銘「寛文二壬寅年□月四□施主三浦但馬守共次」とみえる。

※23 「身延山史」(久遠寺編・昭和四十八年刊)には「惣門の施主は三浦宅岐守明敬の母堂寿応院殿にして、寛文五年九月吉辰落成せり(二二九頁)とある。しかるに、「身延山略譜」(妙了寺蔵)二十八世日龔上人条には「惣門三間半二三間新建寛文五乙己年九月吉日棟札日龔判形施主八三浦志摩守明敬ノ母寿応院殿」とある。身延山史と身延山略譜との「宅岐守と志摩守」との異同については、「藩翰譜」第二卷(人物往来社・昭和四十二年)に徴して「宅岐守」を正としたい。ともかく総門は寿応院没(寛文二年)後の寛文五年の建立である。

◇徳川家 順正院の墓碑◇

徳川第三代將軍家光の側室・順正院妙喜日圓夫人の墓碑が、身延山上之山の通称「梅ヶ丘」に在る。現在の墓碑は夫人没後の六十六年目に再建されたもので、台座背後の「宝永(四年)丁亥十月地震破壊故重營建之」とある碑銘から明らかである。再建されて既に二百六十八年(昭和五十年現在)を経ている。宝塔は風蝕剝落もなく、徳川本家の往時の威光を眼前することができる。おしむらくは、昭和三十四年^(富士川台風)・^(伊勢湾台風)台風七号・十五号の米襲によって、風倒した杉の巨木が墓所を直撃し、宝塔を除いて玉垣・葵の紋を彫り備えた重厚な門扉などが全壊したことである。

夫人はお夏の方とよばれ、江戸城西ノ丸に権勢を張った。京都立本寺の日審上人に就て剃髪し、順正院妙喜日圓と号した。その小伝は「仏祖統紀」^(※24)にみられる。また墓碑台座の四面に銘があり、夫人の篤信そして建塔の由来などが彫られている。剝落もなく碑銘は容易に読むことができる。



川原正院墓碑正面(於上之山)

(順正院墓碑正面碑銘)

妙 天和三癸亥季

法 順正院殿妙喜日圓大姉尊儀

塔 七月二十九日

夫人は甲府宰相徳川綱重(家光の第三子)の生母で、この綱重の子豊綱は後に家宣と改め、第六代將軍の座につき五代綱吉の側用人柳沢吉保をしりぞけ、悪令と云われた「生類憐みの令」を廃止し、幕政の綱紀をひきしめた。

順正院は夙に篤信の人であったが、延宝六年甲府宰相綱重が逝去するや、悲哀と無情に沈む日々が多くなり、先に記した如く剃髪して仏門に入った。古来より「妙経全函不勞誦徹」と云われる法華信者となった。婦人は生前、身延山への参詣を願いつつも果されなかった。側近の老女に遺命して「妾に代りて百日の間身延山に留り唱題巡拝すべし」と。六代家宣は祖母の悲願を成就させんとして、始め遺骨は浅草幸龍寺へ納められ、次で芝の増上寺へと葬られたが遺命に従って身延山へ改葬せしめた。死者の身延山参詣として伝えられている。生ける人同様に道中行列を整えての

登山であつた。

※24 順正院略伝（本化別頭仏祖統紀卷二十五）

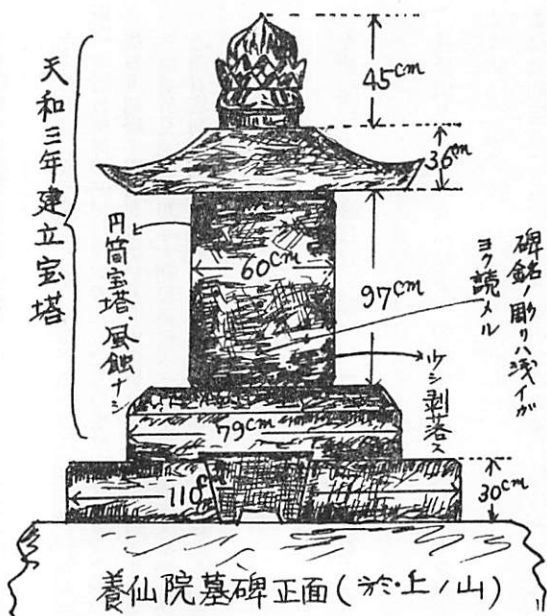
○順正院妙喜日円大夫人者清揚剛母文廟之祖母也父者藤枝氏法号了性院宗縁日証寛永十年癸酉四月逝母法号德寿院妙喜日命天和元年辛酉四月逝也全函不勞誦徹早喪父幸事猷剛省母竭孝也延宝六年戊午十二月清揚剛薨矣於茲深知世榮幻夢婦依于立本寺日審上人稱戴髮弟子受今之法号一心唱題念高祖之外無他事平生所願一詣身延山消滅無始罪障而大家敬重經年未果天和三年癸亥遽然感疾七月二十九日正念取滅告老侍女日多年有身延詣拜之願未果而終遺憾不少吾死以生前儀衛諸堂巡拜汝代而燒香逗留一百日日日講堂頭說法受戒誦唱題一擬生前聽聞而後設拜歛之式□全身於山上言了閉目孝孫文廟一任遺語駢路殊塵不滅生前之式山而舍于竹之坊堂頭日脱上人日日率誦說法華受戒文情魂美如在侍女一同受之朝昏配膳灸積敬重百日畢矣有司奉訃調送葬礼構中陰会石廟如活山門增耀又 文廟降命淺草幸龍寺立牌設殿祭儀嚴重每月廻駕拜詣不怠附祿巨石垂德不朽矣末法護法神乎哉

※25 宝塔台座碑銘「報恩厚本者仁心之先務也故内外聖賢讚之行之其蹤可不尚哉吾源甲府君当祖母順正院殿妙喜日円大姉一百箇日立一基石塔刻經王題名而茲納於身骨大聖賢之迹也夫高顯者遮那之身形応化之妙像其功德盛于經論矣況刻以開權經王者豈尋常形像之謂乎於巨益於見聞聞触知与大利於過視未來爽不可量也願大姉酬此功薰如仏姊受記效胤女得果余慶伝千万世勝復徹十方界作銘曰闡祖母恩造斯石塔刻經王名茲納身骨妙法功烈龍女即覚吁此勝緣益不可測培木演根枝葉叢□余慶広伝万世維吉」

◇松平 久松家 養仙院墓碑◇

養仙院殿了榮妙護日立大姉は、丹後宮津城京極高広の女で、松山十五万石松平（久松家）三代定頼に嫁し、松平家（久松家）をあげて浄土宗から本宗へと改宗せしめた。その法薫は大である。

身延山上之山（丈六堂下）の墓碑には、天和三年建塔のものと、明治十六年四月・裔孫從五位久松定護氏が建立したものと二基あり、明治建塔の碑には、側背にかけて墓碑誌が刻られている。（※26）夫人の略伝は「仏祖統紀」にみえる。（※27）また養仙院竝に久松家の身延山への外護丹精に因しては、「身延山史」に紹介されている。（※28）殊に二天門（白毫楼）の



(養仙院墓碑正面碑銘)

南無多宝如来天和三年癸亥十一月十六日

南無妙法蓮華經養仙院了榮日立大姉

南無釈迦牟尼仏松平穩岐守定長之母堂

※宝塔には「殿」と「妙護」の三字なし。

創建者として知られている。^(※29)

久松家は元来、菅原道真の後胤と云われ、永禄三年幕命によって松平姓に改め、明治廢藩に伴い再び久松姓に還元した。

養仙院の長子・定長は松山城十五万石の家督を継ぐ。二男は今治藩を、三男は桑名城主を継ぐ。女は薩州綱久及び酒井若狭守忠圓に嫁す。(法号・龍光院殿妙応日感大姉と云う。)

久松家竝に養仙院の塋域には、長子定長夫妻、其の他の墓碑が存し、桑名十一万石を継いだ定重の養父定良の墓碑は延師堂裏の青銅多宝塔型がそれである。

久松家塋域（上之山丈六堂前下）墓碑銘

○松山侯夫人京極氏藏骨碑（側背に碑誌あり）

天和三癸年十一月十六日薨去

享保二丁酉二月十九日

○春光院殿瓊室妙樹日榮大姉

松平隠岐守源定長之室

延宝二甲寅年二月十二日

○題目 享徳院殿隠岐守四品陽山日静大居士

延宝六戊午年四月六日

○題目 眞理院殿智照日耀 出儀

延宝七己未年二月二十三日

○題目 天真院殿圓諦日觀 出儀

桑名城主摂津守従五位下源朝臣定良

○題目 光徳院殿圓妙日法尊儀（唐銅宝塔）

明暦三年七月八日

※26 養仙院（明治十六年建塔）墓碑誌

「夫人京極氏宮津城主高広之女年十七帰松山城主松平公定頼生三男四女長子定盛多病仲子天鏡公定長駿封食十五万石松山侯家世奉
浄土宗而夫人特崇信日蓮蓋因母家奉其宗也甲斐身延山久遠寺為日蓮派本寺諸因信徒荷得身造本山者皆不遠千里而至焉而之篤不自己
寡之後会母氏十三周年忌得詣詣本山為母氏貧其福侯家貴婦冒雲霧攀峻嶮矣是為創始見者感歎稱其孝夫人見山無報時鐘憫山中人不弁
時刻僧侶勤經無節命鉤鐘寄贈且建之樓并造司辰者衣糧資悉莫不供給尋又与宝塔干寺後山上高一丈六尺柱檣梁桷雕鏤精巧塗以丹土人
詫異稱曰朱塔天和三年十一月十六日卒蓋養仙院享年六十有九時天鏡公尼先卒孝孫大龍公定旨承遺志茶毘于江戸谷中瑞輪寺收骨送本
山藏此塔中爾來二百年松山侯世葺修之今也藩封己撤不能復如曩時時会寺主日鏡上人以其寺堂宇悉罹災乞此塔移寺中孝裔孫促五位君
定誤久之撤塔付上人基礎如故建碑其中中央藏骨其下因使啓記其米由如此松山侯本久松氏以德川氏命称松平氏明治廢藩後復本姓」
明治十六年四月

※27 養仙院略伝（本化別頭仏祖統紀卷二十五）

○養仙院了榮妙護日立大夫夫人者京極丹後守源高広之女嫁于予州松山城主松平隱岐守定頼生一男二女一男者隱州定長長女者嫁于薩州
網久法号真修院次者嫁于酒井氏忠法号慶雲院也夫人天資至信内修唱題外竭護法力身延山白菴樓十二時洪鏡山上小塔高一丈六尺
其外喜捨若干至今夫人之裔拾芳雜志天和二年壬戌十一月十六日以寿而終矣初母寿光院十三回之年詣于身延山冥福追普具竭孝志見人
湿袖大家老姉沙嚙凌霧一步一唱誓不廢題蓋代干寿光夫人也

※28 久松家竝に養仙院の外護丹精については、「身延山史」（久遠寺編）百三十頁。百五十六頁以下。百五十九頁を参照のこと。
※29 二天門（時鐘白菴樓）鐘銘

「京極氏落飾号養仙院其弟信取之又落飾号長松院二信女篤奉三宝無不以外護佛法為任也近況山中不知時乃鑄大鐘而寄焉又卜宝樓干
方丈之南某処而鐘鳴鐘行者無衣食資夫人又給焉於是乎延山十二辰之候備矣……時延宝八年歲次庚申中秋殺日 日脱誌」

◇ 藤堂家三智院墓碑 ◇

三智院とは、伊賀上野・安濃津三十二万石藤堂家二代高次公のこと。法号を三智院殿圓明日融大居士と云い、延宝
四丙辰年十一月十六日逝去す。

藤堂家は元來、近江国犬上藤堂村に住し、初代高虎のとき浅井長政に仕官、後に織田信澄に仕え、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際は専ら水軍の指揮に当り、慶長五年関ヶ原の合戦には徳川方の先陣をつとめ、戦後功によって伊予二十万石に封ぜられ、更に豊臣氏の進出防備の拠点たる伊賀全領国三十二万三千石の大名に封ぜられた。

三智院藤堂高次は、伊予板島で生れ元和四年伊賀安濃津城主となる。伊賀者の他藩への仕官を禁じ、領民を治めて新田の開拓、学問の奨励、自らも絵画をよくした。

高次公の墓碑は没後の翌年、延宝五年上之山(一六七七年)(丈六堂庵室の壇上)に建立された。三米余(三、一)の大石塔である。そのと

き永代供養料として金五百兩を身延山へ寄進された。(※30)当時の山内支院(七十ヶ坊)は極度の困窮状態にあったが、右の祠堂金のうち貳百兩を支院各坊へと分与された。爾來支院は三智院の寄進を徳となした。現在に残る「三智院講」の由来はここにあり。

※30 三智院殿寺中祠堂金運判

「三智院殿内明日融大居士為身延山永代日料料黄金五百兩寄府之金取本院當時寺中困窮故以其内貳百兩賜与之因茲正月忌日持房満山遂祖師堂集會播看妙典一部兼於各坊中毎月廻向無退転勤之以備導盜御菩提而已延宝五丁巳年三月三日当山三十世日通・塔中七拾坊運署」。

◇その他の墓碑と碑銘◇

正徳二壬辰年七月十二日(享年九十歳)

○浄心院殿法勇日笠大姉

※浄心院は紀州徳川頼宣の側室で、その生子頼純は、承応三年從四位上左近衛権少将左京大夫に任ぜられ、寛文十年伊予西条三万石の城主となる。墓碑は頼純の子・頼政の造塔(墓碑前の二基の石灯籠に「從四位侍從松平左京大夫源頼政」とある)で、上之山延寿坊(円光庵)つき当りにある。

寛文三年正月三日

○龍光院殿妙応日感大姉

※松平久松家の出で酒井若狭守の室。大光坊より半丁程下の左側杉林の中にあり。一丈五尺に及ぶ大石塔である。龍光院の母は養仙院（本書一五一頁）である。

享保十六年五月二十九日

○瑞祥院殿天山勝光日浄大姉

※墓碑の裏面に「九条関白輔実公ノ姫君尾張中納言吉通公ノ簾中」とある。上之山鬼子母神堂途上の右側五輪宝塔がそれで、他に侍女近士の墓石数本がある。

貞享五年戊辰二月二十九日

○圓成院良心日悟大姉

※信州小諸城一万五千石牧野遠江守康通の母堂である。牧野氏は始め今川氏に仕え、徳川氏と常に戦ったが、康成代に家康の軍門に降って小諸城に封ぜられ、康通はその子息である。墓碑は丈六堂前無縁墓地内に在る。

延宝八年正月二十二日

○瑞苑院道頭日応大居士

※墓石（角の塔）の裏面に従五位下前備中大守姓太田氏資宗」とある。丈六堂より五十米程上った右側に在り。丹波太田の住人源三位頼政四世の胤國綱が始めて太田姓を名乗りて後、関東扇谷上杉氏に仕え、十代目に江戸築城の道灌（資長）が出、道灌から五代が当墓石の主。資宗である。資宗の父重正徳川氏に仕え、資宗も家康・秀忠に歴史し、遠州浜松二万石を領し、後掛川に移る。資宗の略伝は「別頭統紀卷廿四」にあり。久遠寺蔵胡直筆幅物。後陽成院親翰などは資宗の寄進（寛文十二年壬子八月十三日日付奉納箱に書込みあり）による。

寛文六丙午年正月廿四日

○瑞林院殿浄秀日芳大姉（廟墓なし）

※「別頭統紀卷二十五」に略伝あり。

○瑤林院淨秀日芳大夫人者加藤肥後守清正女紀伊亞相賴宣室也信地綿綿菅苗殊長宗門諸山振外護力喜捨如許矣寛文六年丙午正月二十四日感疾而逝葬於武州池上孝子重相光貞創造報恩寺篤阿之光貞即室天真院妙仁白雅大夫人伏見王女捨養殊林阿瑤夫人遺芳信烈不滅兩夫人宗門諸山振護法力夫幾許乎身延明本藏經併殿日雅大夫人喜捨是皆兩夫人余烈也。

正徳元辛卯年十月七日 行年七十一歳

○源性院殿嶺空日純大居士（在上之山左京家瑩域）

※紀州徳川頼宣の子（母は淨心院殿）、伊予西城松平左京大夫源頼純公の墓碑で、四方に石の玉垣あり、周圍に塔（灯）籠十数本あり。

天和壬戌二年

○首題 眞修院妙栄日長大姉

霜月上旬七日

※墓碑裏面に「故松平薩摩守源綱貴從四位侍從ノ悲母ノ塔……」とあるも、風蝕が甚だしく判読が困難である。昭和二年七月五輪大石塔の傾斜復元工事が久遠寺により施工されている。

あ と が き

筆者は昨年一月以来、祖廟域・上之山地域における廟墓の現地調査を古記録と徴しつつ続けてきた。いまその一部を未完ながら本誌上に報告することにした。従つてその内容は不備だらけである。この事は一には筆者が斯学に対する門外漢であり基礎知識のないこと。二には調査と資料整理に当る日時が無かつたことに帰している。昨年来より廟墓の調査を行なつてきたと云つても、それは文字通り寸暇をみつけての調査であり、正味日時は少時であった。言訳けのようだがこの事は記しておきたい。筆者自身、微力ではあるが祖山教学の場で少しは役に立たせて頂きたいと願っている。学的な調査や研究の場と時間が欲しいと願っている。このことは独り筆者の感慨に終らしたくないものである。身延山教学の将来の發展・学的活動の充実に思念を馳せるとき、学園の機構整備を早急にすすめなければならぬ。幸いにも昨年六月、身延山縁由の望月日滋法主猊下・小林顕栄総務猊下が御入山され、爾

来身延山教学振興のため鋭意尽力されておられます。このとき、兼智と英知を集めて学園の発展のため、英断ある方策が切に望まれるのである。

それについても、嚴寒の日々再三にわたり宗祖大聖人御宝塔の近く、廟墓の調査を行うとき、往昔七百年前大聖人の草庵における妙法論談・要文読誦の御生活がしのばれて、おもわず熱き涙にかきくれて身内を貫いた法悦は忘れえぬところである。報恩湧陀とともに寒さを忘れた幾時間であったことか。

(昭和50、5、8)